国土交通省北陸地方整備局

信濃川下流河川事務所

waterfront of Niigata-city

Kineicho Coast

金衛町海岸

―松林の向こうに広がる世界へ―

新潟の松林

飛砂対策として江戸時代から行われてきた松の植栽は、今では立派な林となり野鳥の営巣や市民の散策の場となっています。そして、この松林を抜けるとそこには日本海、金衛町海岸が広がります。

砂浜の碑（護国神社内）

護国神社の近くには多くの文学碑があります。この碑は北原白秋という文学者が新潟の砂浜をうたったものです。

金衛町海岸の夕日

日本海に沈む夕日を観に若者からお年寄りまで多くの市民をはじめ県外客も訪れます。

海岸の道

海岸にはボードウォークがあり、散策やジョギングをする多くの人に利用されています。

護国神社

戊辰戦争や太平洋戦争の戦死者が祀られています。初詣には県内3位の人出があります。

マリンピア日本海

本州日本海側最大級の水族館で、約450種20,000点の生物が観られ、県外客も多く訪れます。

会津八一記念館

新潟市の名誉市民で多方面に大きな足跡を残した会津八一の書作品を中心に書商、原稿、遺品などが展示されています。

お城のある公園（海浜公園内）

浜の近くには、松林に囲まれた広い公園があります。晴れた日の休日には多くの家族連れが集まります。

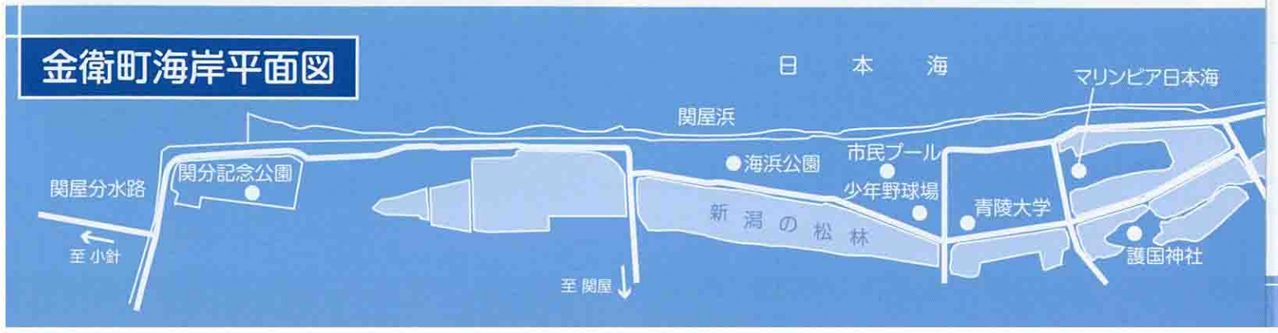
夏の関屋浜

海水浴をはじめ、大学等のヨット部の練習や魚釣り、ビーチバレー等に利用され、浜茶屋も建ち並びます。

金衛町海岸のロケーション

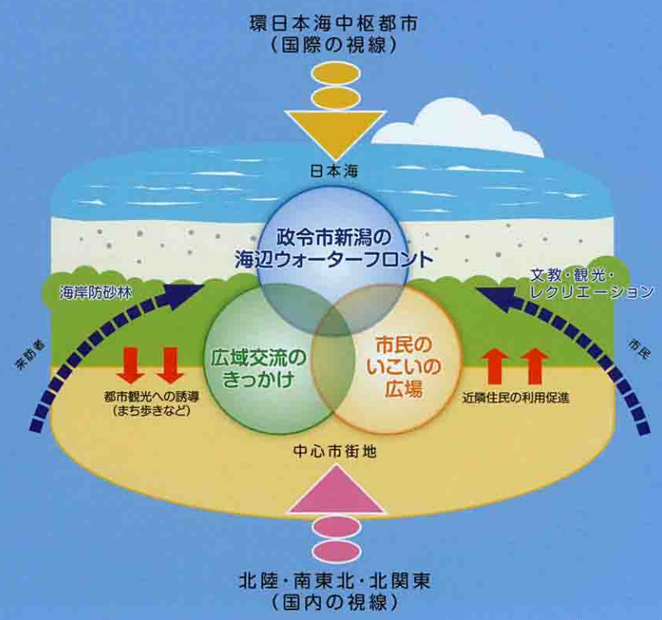
金衛町海岸の近くには商業の中心の古町や、市役所、裁判所など重要な施設があり、多くの人々が集まります。都心に近い金衛町海岸は、松林や日本海、関屋浜などの豊かな自然に恵まれています。そして、護国神社という大切な施設やマリンピア日本海のような楽しめる施設も有ることで、市民のいこいの場として親しまれています。

金衛町海岸平面図



新しい金衛町海岸が目指すすがた

- 日本海側の中枢拠点、国際交流拠点として、金衛町海岸を日本海からの玄関に相応しい新潟のメイン・シンボルとします！
- 新潟駅、萬代橋、古町を通る都市軸の延長に位置する空間の特徴を活用します！
- 古くから市民に愛された海岸としての地域の個性を継承します！
- 周辺都市、他県からも訪れる観光・レクリエーションの魅力を強化します！
- まちの中心から近い海岸として、多くの市民に愛されるいこいの空間とします！
- 市民と一緒に計画の策定を目指します！



広がり続けていた砂浜

金衛町海岸は、信濃川や阿賀野川から流れ出る大量の土砂によりつくられてきたもので、明治時代のはじめの頃まで海岸線は広がり続けていたと考えられます。その浜辺では、昭和30年頃まで、春の浜漁や浜辺の祭りを行っていました。また、浜辺に近い小中学校では授業の場としても使われていました。

新潟市郷土資料館

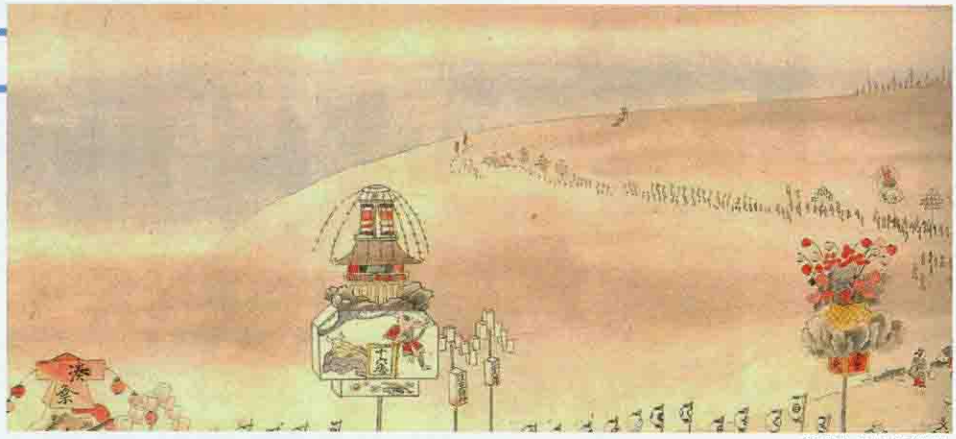
春の浜漁

厳しい冬が終わり、春がくると、砂浜では地引網によるイワシ網漁が行われていました。イワシの大群が押し寄せると海面が盛り上がることもあったといいます。

浜には出店がたち並び、人々はお酒やお弁当を持って浜へ行き、一日中のんびりと遊んでいました。

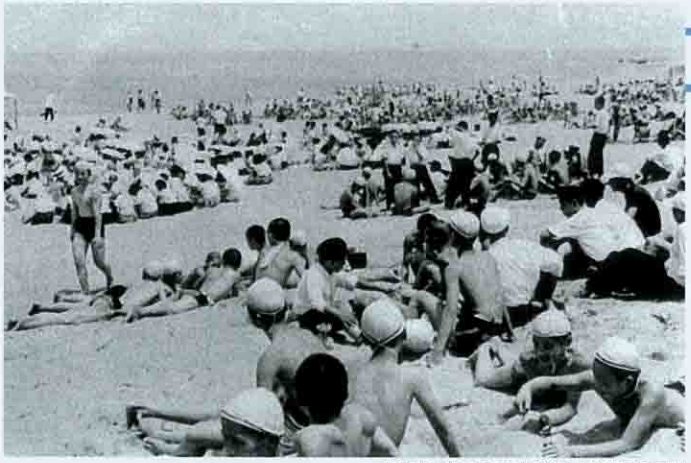
浜辺の祭り

七夕の日は砂浜を舞台にして祭りが行われました。昼間は町内ごとに、まといや屋台を引いて練り歩き、夜はとうろうをかついで浜へ出ました。その灯りは遠く佐渡からも見えたといいます。



新潟市郷土資料館

関屋中学校の水泳大会の様子



写真提供：関屋中学校　昭和30年代

砂浜で遊ぶ子供たち

写真提供：関屋小学校　昭和30年代

急速に消えていく砂浜・・・

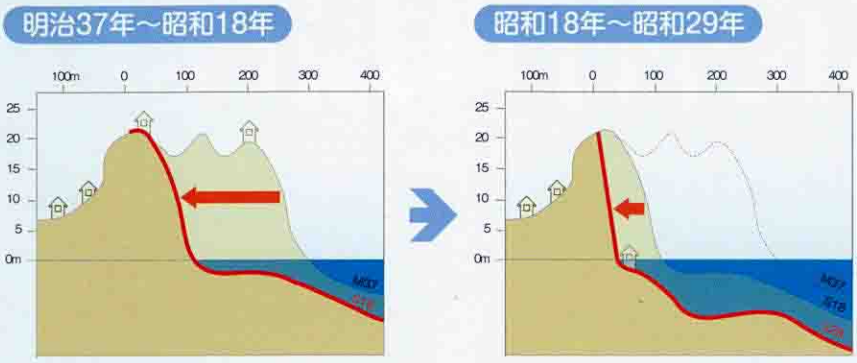
環境の変化

昔から人々に親しまれてきた金衛町海岸は、様々な原因が重なり、急速に砂浜が失われてしまいました。この現象は海岸侵食と呼ばれています。

新潟の海岸は明治22年以降、海岸侵食の影響によって最大で360mも後退したことがわかっています。

水没してしまった旧新潟測候所

昭和3年に、波打ち際から約100mも離れたところに建設された旧新潟測候所が、海岸侵食によって昭和24年には海中に水没してしまいました。下の図は、海岸侵食の様子を示した断面図です。



水没してしまった旧新潟測候所のようす

なぜ砂浜は消えた?

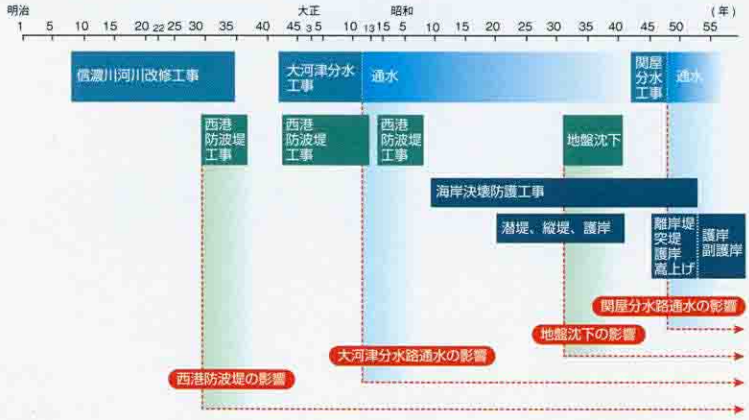
海岸侵食の原因

どうして新潟の海岸侵食は起きるのでしょうか。その原因は明確になったとはいえませんが、以下の3つが考えられています。

①西港防波堤の建設で、土砂の流れが変わってしまったこと

②水害から街を守るための工事により、信濃川から流れ出る土砂の量が少なくなってしまったこと

③天然ガス採取にともなう地盤沈下によって沈んでしまったこと

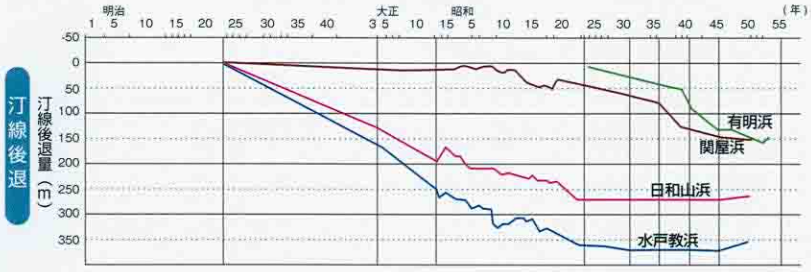


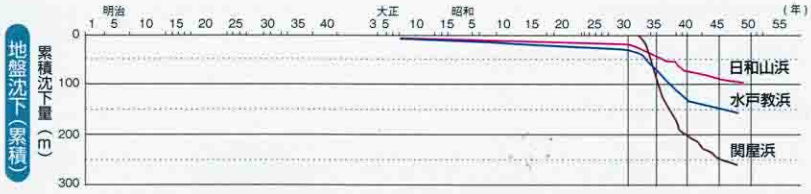
海岸線の変化

海岸線の変化と、建設工事や地盤沈下の関係を右図で詳しく見ることができます。

昭和の始めころから急激に砂浜は減りはじめました。関屋浜では特に、昭和20年代から40年代ころにかけて、変化が大変大きかったことが見て取れます。

近年は、侵食対策の進展により大幅な砂浜の侵食は見られませんが、季節ごとに侵食と堆積を繰り返したりするなど、不安定な傾向はいまだ治まっていません。また、直接目で見ることはできませんが沖合いでは、今でも海底が侵食されています。





近代の海岸と人々とのかかわり

今でも親しまれている金衛町海岸

海岸の保全対策を行ったところでは、砂浜が回復し、レクリエーションや学習の場としても親しまれています。
一方、江戸時代から近年まで進められた松などの植林により、立派な防砂林として成長した松林は、野鳥のすみかとなっているほか、市民の散策の場となっています。春から夏、休日には多くの人が訪れます。

現在の金衛町海岸の様子

新潟海洋クラブの活動

大学生のヨットの練習

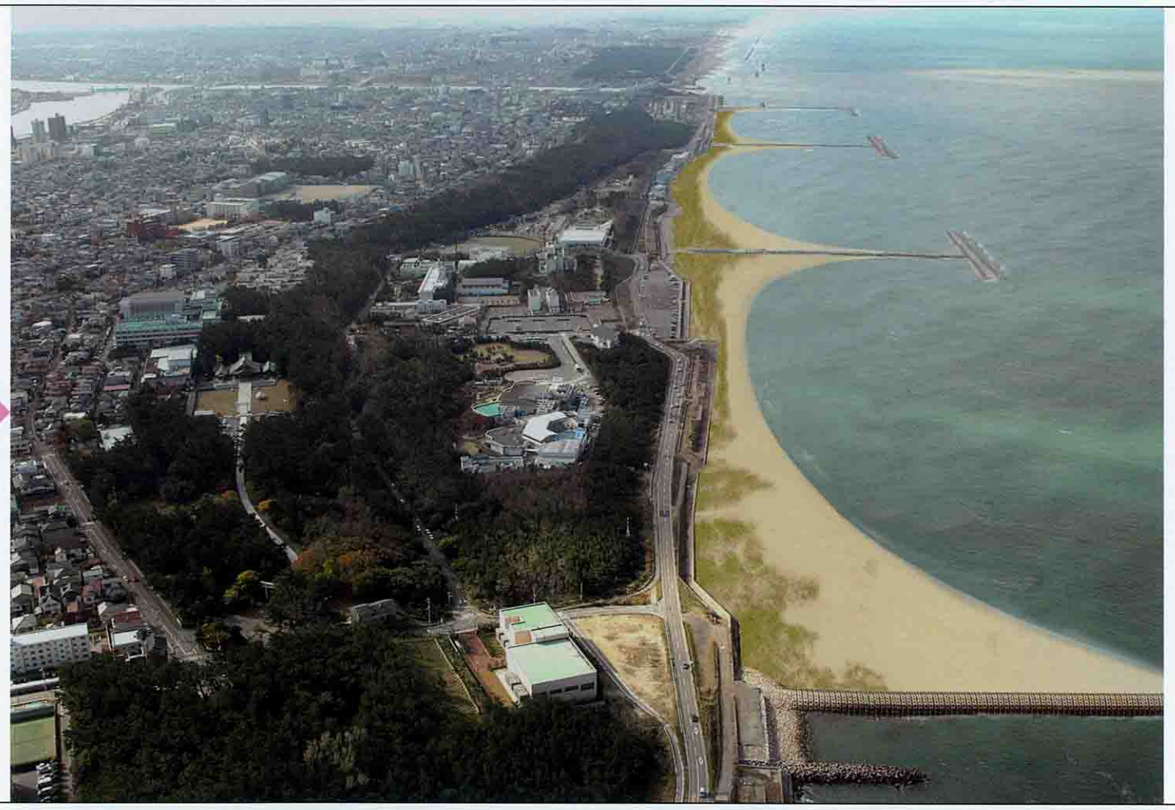
松林での野鳥観察会

防砂林の植樹

これからの金衛町海岸

これからの金衛町海岸は、かつての市民のいこいの風景も取り戻しながら、マリンピア日本海のような市民に親しまれている場所を充実させ、水の都・新潟市のシンボルとなれるような、海岸づくりを目指します。
新潟市は平成19年4月に政令指定都市となりました。金衛町海岸は新潟市を代表する海のウォーターフロントとして、市民はもとより、周辺都市、他県、そして国際交流の舞台として一層の有効な活用が期待されています。

将来の金衛町海岸の様子



ボランティアによる砂浜清掃

地域の学校の生徒や、家族がボランティアで砂浜を掃除してくれています。こうして今の砂浜はきれいに維持されています。これからもこうした人々の活動が大切になっていきます。

砂浜で遊ぶ親子たち

これからの金衛町海岸は、このような微笑ましい光景がもっと見られるような海岸にしていきましょう。
※写真はイメージの例としてＪＣＩ主催のサンドクラフトIN新潟の様子を掲載しています。

Kineicho Coast